

手術リスクの高い早期肺癌症例 に対する縮小手術の意義

あら き くに お め つぎ ひろ ゆき
 荒 木 邦 夫 目 次 裕 之
 み よし けん いち ろう とく しま たけし
 三 好 健 一 郎 徳 島 武

キーワード：肺癌，消極的縮小手術

要 旨

高齢，低肺機能などで，手術リスクの高い早期非小細胞肺癌症例に対する消極的縮小手術の臨床的意義を検討した。

上記の理由で肺葉切除が困難と判断し，肺部分切除手術を行った臨床病期 I A 期非小細胞肺癌 35 例を対象とし，その予後を解析した。

術後再発は 15 例に発生し，局所再発（同側肺内再発）は 4 例，その他 11 例は遠隔転移であった。全死亡数は 16 例であり，死因の内訳は癌死が 8 例，他病死が 8 例（手術関連死は 1 例），癌死は全て遠隔転移が直接死因となった。術後 5 年全生存率は 48.6%，50% 生存期間は 59 ヶ月，無再発 5 年生存率は 53.9% であった。

手術リスクの高い早期肺癌症例に対する縮小手術である肺部分切除術は安全な術式であり，癌の制御に関しても治療の選択肢になりうると考える。

はじめに

早期に発見されるも，高齢或いは低肺機能などが原因で手術リスクが高く，肺葉切除術が困難な非小細胞肺癌症例に対する縮小手術の臨床的意義を検討した。

対象と方法

1990 年から 2004 年の期間で，肺葉切除耐術困難と判断し，縮小手術（肺部分切除術）を行った臨床病期 I A 期非小細胞肺癌 35 症例を対象とした。肺葉切除が困難とした呼吸機能は 1 秒量 800 ml 以下を目安とし，年齢は 80 歳を越える症例を一応の適応とした。ただし個々の症例について，全身状態，日常生活動作（ADL）の程度を考慮に入れ，総合的に術式を判断した。これらの症例に対して，術後再発の有無，再発部位，死亡の有

Kunio ARAKI et al.

独立行政法人国立病院機構松江病院外科
 連絡先：〒690-8556 松江市上乃木5-8-11